

厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業))
「社会構造の変化を踏まえた保健医療にかかる施策立案に資する
国際疾病分類の国内導入のための研究」

分担研究報告書(令和3年度)

ICD改訂と国内導入に関する動向整理

研究代表者 小川俊夫 摂南大学農学部食品栄養学科公衆衛生学教室

研究要旨

本研究の目的は、ICD-11の国内導入に向けてICD改訂動向や各国におけるICD-11導入状況等について情報収集し、わが国に適したICD-11の実現に資する基礎資料を作成することである。研究2年目の本年度は、ICD改訂動向に関する国際会議に参加して情報収集を行なったほか、医療情報学連合大会においてICD改訂に関する研究成果の発表を行い、ICD改訂に関して意見集約と意見発信を実現した。ICD-11の国内導入は、わが国の医療全般に関わることからその影響は非常に大きい。わが国の実態を踏まえた適切な医療情報を将来に渡って確保するためには、ICD改訂動向に関する情報収集と意見発信を行うほか、ICD-11の分類体系や内容を正確に把握しわが国への影響について詳細に考察する必要がある。

研究代表者 小川俊夫(摂南大学)
研究分担者 今村知明(奈良県立医科大学)
今井 健(東京大学)
向野雅彦(藤田医科大学)
小松雅代(大阪大学)
滝澤雅美(国際医療福祉大学)

(倫理面への配慮)

本研究は国内外の学会などでの情報収集と意見発信が研究主体であり、倫理的配慮は必要としない。

C. 結果

本年度は、WHO開催のICD改訂に関する会議としては、WHO-FICネットワーク会議(2021年10月18~22日オンライン開催)に出席した。

本年度のWHO-FICネットワーク会議は、昨年度に引き続き新型コロナ感染拡大の影響でオンライン開催となった。本年度のWHO-FICネットワーク会議は、10月18日から22日まで連日開催されたが、報告者が参加した会議は、10月18日のCouncilと、21日のOfficial Openingであった。

2021年のWHO-FICネットワーク会議では、ICD-11の各国導入の状況について説明があったほか、多言語対応やAPIなどを活用した利便性の向上、さらには途上国への導入に向けた検討や教育などについて発表があった。またICF改訂、ICHI

A. 研究目的

本研究の目的は、ICD-11の国内導入に向けてICD改訂動向や各国におけるICD-11導入状況等について情報収集し、わが国に適したICD-11の実現に資する基礎資料を作成することである。

B. 研究方法

ICD-11改訂作業の一環として、2021年度に開催されたWHO-FIC年次会議にオンライン参加して情報収集を行ったほか、第41回医療情報学連合大会に参加し、本研究班の研究成果と取り組むべき課題について発表を行った。

開発の現状について報告があったほか、ICD、ICF、ICHI の相互利用に向けたコンテンツモデルの統合に向けたファウンデーションの構築の状況についても説明があった。

ICD の各国導入については、先進各国を中心に準備が進められている状況であるが、途上国でも導入に向けた検討が行われているなどの報告からも、幅広い利用に向けて作業が進展していることがうかがえた。また、昨年度に引き続き WHO としても他言語対応の強化や API を利用した利便性の強化などに取り組んでいるとの報告があった。また、ICD の死亡統計への活用に向けた作業など、ICD-11 各国導入に向けた準備が進展しているとの報告があった。

ICF 改定については、ICF2020 が完成し、実用化にむけた教育プラットフォームの開発などの報告があったほか、ICHI 構築についても順調に進行しているとの報告があった。

ICD、ICF、ICHI の統合については、昨年度に公表されたコンテンツモデルを統合して実施する方法に基づき、実際に作業が進展しているとの報告があった。

D. 考察

本研究の主な目的の一つとして、ICD-11 の国内導入に向けて ICD 改訂動向や各国における ICD-11 導入状況等について情報収集し、わが国に適した ICD-11 の実現に資する基礎資料を作成することである。本報告で示したように、昨年度に引き続き本年度も WHO-FIC 年次会議に参加して情報収集をおこなったほか、医療情報学連合大会で研究成果の発表を行うなど、ICD-11 国内導入に向けて国内外での情報収集と基礎資料となる情報発信を実施した。特に、WHO 主催の会議に参加することにより、ICD-11 改訂状況を把握するとともに、ICD-11 国内導入に向けて有用な仕組みや機能について情報収集をするとともに、必要に応じて WHO に対してわが国からの提案を行うことも重要である。

本年度の WHO-FIC 年次会議において、ICD と ICF、ICHI との連携について様々に議論されており、ファウンデーションの共有などにより ICD、ICF、ICHI の共同利用に向けて一歩進んだと考え

られる。わが国でも、ICD のみならず ICF、ICHI の国内導入と利用について検討が進められているが、今後ますます ICD、ICF、ICHI の研究者が共同してわが国での方針について検討する必要があると考えられる。

ICD-11 の国内導入は医学界全体に影響があることから、関連学会などとの調整も必要と考えられる。本研究班としては、各関連学会の代表などから構成される ICD 国内検討委員会を開催する予定である。研究初年度に引き続き本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響で本委員会の開催はできなかったが、今後は委員会のオンライン開催などをより効果的な情報収集と発信をする必要があると考えられる。

E. 結論

ICD-11 の国内導入は、わが国の医療全般に関わることからその影響は非常に大きい。わが国の実態を踏まえた適切な医療情報を将来に渡って確保するためには、ICD 改訂動向に関する情報収集と意見発信を行うほか、ICD-11 の分類体系や内容を正確に把握しわが国への影響について詳細に考察する必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 小川俊夫、滝澤雅美、今井 健、高橋幸恵、坂本幸平、小松雅代、向野雅彦、今村知明。わが国の公的統計への ICD-11 適用の影響に関する一考察：ICD-11 準拠の死因簡単分類構築の試行と影響分析。医療情報学。2021. Nov ; 41(Suppl.) : 660-664.

2. 学会発表

- 1) 小川俊夫、滝澤雅美、今井 健、高橋幸恵、坂本幸平、小松雅代、向野雅彦、今村知明。わが国の公的統計への ICD-11 適用の影響に関する一考察：ICD-11 準拠の死因簡単分類構築の試行と影響分析。2021 年 第 41 回医療情報学連合大会（第 22 回日本医療情報学会学術大会、

2021年11月19日、名古屋市・名古屋国際会議場).

2. 実用新案登録
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし

3. その他
なし

<参考資料1>

WHO-FIC ネットワーク会議参加報告

WHO-FIC ネットワーク会議
2021年10月18～22日(オンライン開催)

摂南大学 教授 小川俊夫

2021年10月18日(月) Council (Opening)

主要な参加者の自己紹介に続いて、WHOのRobert Jacobより総括の発表があった。以下、その発表の概要である。

WHOのさまざまな活動の目的は人々の健康状態の向上にあり、WHO-FICとしても医療情報の専門家をはじめ医療政策に携わる人々がその目的を果たすことが目的と考えている。また、WHO-FICネットワークとしては、この活動をサポートし発展させるものであると考えている。

WHO-FIC国際統計分類においては、統計分類を利用するための教育に関するメンテナンスの方式を確立したほか、伝統医学のreference groupを構築した。さらに、WHO-FIC協力センターを通じて各国政府との協力体制を強化した。特に、アフリカ諸国や中南米諸国でICD-11導入に向け各国政府との協力体制を強化した。もちろん、欧米諸国でもICD-11の導入に向けてWHOと各国政府の協力体制が強化されている。アジアでは、各国政府やWHO-FIC協力センター間の協力体制の強化やインドにおけるWHO-FIC協力センターの設立などが実現している。またNGOなどとの協力体制も強化されている。

ICDやICFのトレーニングプログラムについては準備を進めており、ICFについては英語での教育プログラムの構築と並行して各国言語での教育プログラムの開発も進めている。また、ICF2020の開発とともに、ICDとICFが同じプラットフォームで利用可能となる予定であり、その利用可能性が大きく広がると考えられる。その実現に向けて、APIの実装などさまざまな機能追加などの活動を行なっている。また、ネットワークが十分に発達していない開発途上国などでも、ICD-11やICFを機能的に利用可能とすべく、日々努力を行なっている。さまざまなユースケースに対応するために、死亡や疾病統計との対応についても検討を行なっている。また多言語対応についても検討しており、フランス語やロシア語などではかなり言語対応が進んでいる。

上記Robertからの発表後は、休憩を挟んでSNOMED CTとの連携に関するプレゼンテーションがあった。SNOMED CTとICD-11との連携については、マッピング作業を継続して

実施しており、連携の実現に向けて検討を進めているとの発表があった。最後に、各委員会の活動状況に関する概要の報告があった。

2021年10月21日（月） Official Opening

まず、会議の冒頭に ADG からの挨拶があった。ADG によれば、WHO-FIC をはじめ各国の努力により、医療関連データの質の向上が顕著で、今後とも参加者をはじめ皆さんの努力に期待したいとのことであった。次に、Robert より WHO-FIC ネットワークの現状について概要報告があった。ICD-11 については、各国への導入に向けた作業が各国で開始されており、また WHO によりファウンデーションやブラウザなど ICD、ICF、ICHI の実用化に向けた作業が鋭意行われているとのことである。また、ルワンダのような開発途上国での ICD-11 導入に向けた検討が行われているとのことであった。

続いて、各委員会の活動状況に関する報告があった。

(1) CSAC

CSAC からは、前回の年次総会で ICD-11 の修正案が 158 件提出され、うち 83 件が承認されたとの報告があったほか、ワクチンに対する副作用に関する項目が ICD-10 と ICD-11 の両方に追加されたとのことである。また、自殺など未解決の分類についても本年次会議で討議予定である。ICF に関しては、C-SEC の ICF 部分で討議されており、本年次会議にて ICD と同様に修正案について討議予定である。また、ICF について修正案の検討・決定に関する仕組みづくりも完成しており、新しいプラットフォームでの ICF の作業ワークフローが完成され、実施される予定である。

(2) EIC

EIC からは、教育に関する進展について報告があったほか、伝統医学や ICF に関する教育プラットフォームの開発と活用について報告があった。

(3) FDC

FDC からは、ICD、ICF、ICHI 共通のコンテンツモデルについて報告があった。また、ICD-11 の国内導入について、南アフリカでの取り組みについて報告があったほか、ICHI の開発状況について報告があった。

FDRG からは、ICF の活用に関する取り組みが報告されたほか、ICD との連携やユースケ

ースについての取り組みについても報告があった。また、WHO/FIC ファウンデーションに関する開発の現状についても報告があった。特に、共通のファウンデーションを用いた統合コンテンツモデルの構築が進んでおり、ICD、ICF、ICHI それぞれの活用が可能になったとの報告があった。またブラウザや Coding Tool の開発も進んでいるほか、死亡診断書の標準フォーマットの開発に関する取り組みについても報告があった。

(4) MbRG

MbRG からは、ICD-11 及び ICHI のケースミックスツールの開発をしており、ICD-11 導入における希少疾患やがん登録への活用についてもサポートしているとの報告があった。

MRG からは、ICD-11 導入に伴う死亡診断のルールについて検討を行ったほか、ICD-11 各国導入に向けたサポートを行い、また ICD-11 改訂プロポーザルのアドバイスを行っているとの報告があった。

(5) MSAC

MSAC からは、昨年は提出されたプロポーザルのうち 28 件についてレビューを行い、MSAC のワークフローを構築したほか、COVID-19 の分類に関する討議を実施したとの報告があった。また、希少疾患における Human Phenotype Ontology (HPO) の適用についてパイロットテストを実施中との報告もあった。

(6) ITC

ITC からは、iCAT や多言語対応プラットフォーム、プロポーザルシステム、ブラウザなどのメンテナンスとアップデートについて報告があった。API の機能拡張として ICF と ICHI の統合についての取り組みや、MCCD (Medical Certificate of Cause of Death) の開発状況や omics などを用いたファウンデーションと他の分類との連携についても報告があった。

TMRG からは、ICD-11 TM1 のレビューが完了したことや、インドなど 8 カ国の参加により TM2 モジュールの開発が行われているとの報告があった。

(7) WHO 地域事務局からの報告

WHO の各地域事務局から WHO-FIC 関連の活動について報告があった。

以上